

柴田 翔

——『されどわれらが日々』からの成熟

綾 目 広 治

一

一九六四年に第五一回芥川賞を受賞した『されどわれらが日々』(文藝春秋、一九六四・八)は多くの読者を獲得した小説で、映画化もされた、作家柴田翔の最も知られた代表作である。『されどわれらが日々』について秋山駿は、「信念の崩壊や自我の挫折に見舞われる登場人物たちの、いわば挫折の時代に生きざるをえなかった物語は、(略)六〇年安保闘争の敗北後の青年達の心情に合致していた」と述べている。もともと、この小説は「安保闘争の敗北後の青年達」だけではなく、安保闘争以後の、ずっと後の世代の読者にも広く読まれた。そのことは、石川巧が「モラトリアムとしての〈知性〉——柴田翔『されどわれらが日々』論」(『高度成長期クロニクル 日本と中国の文化変容』へ石川巧他編、玉川大学出版部、二〇〇七・一〇)所収)で、目配り良く跡付けている。

しかし、そうであるにしても、『されどわれらが日々』がやはり安保闘争後の挫折ムードに最も合致した小説であったことには間違いない。ただ、この小説で語られた話は、六〇年の安保闘争での敗北やその後の時代の事柄ではなく、それ以前の血のメーデー事件や、一九五〇年代前半当時の日本共産党主流派による武装闘争時代のことであった。『されどわれらが日々』には、様々な登場人物が現われて、それぞれが書簡や回想の形で各自の立場を語るのだが、挫折の問題を端的に語っているのは、「曾根への佐野の手紙」である。まず、その内容を簡単にしながら、手紙から見られる問題について指摘したい。

手紙によると、東京の高校の学生運動の中心であった〇高校に在籍していた佐野は、高校三年の時には「細胞のキャップ」になったように、高校生の活動家の中ではリーダー的存在であった。しかし、一九五二年のメーデーの時、佐野は皇居前広場で尻込みする下

級生たちを前にして激しくアジリながらも、振り上げる警棒を持った警官の「凄い形相をみた瞬間」、自らは「突然激しい恐怖に襲われ」、その場から一目散に逃げたのである。「ぼくは、自分では口で勇ましくアジリながら、最後の土壇場でみなを裏切ったことをわすれることは、できませんでした」と、佐野は手紙で語っている。

その後東大に入学した佐野は、裏切りの負い目を内心持ちながらも、政治活動に献身的に関わり続けた。佐野は語っている、「もし党から離れたら、その時のぼくは、自分が持っている一番大事なものを、自分に対して自分を誇ることでできたただ一つのものを、完全に、取りかえしようもなく失ってしまうと思えたのです」と。党は彼のアイデンティティそのものでさえあったわけである。やがて佐野は、党主流派の武装闘争路線に従って山村工作隊として東北地方に潜入することになる。これは佐野にとっては、「地下活動の中で、もう一度自分を試してみよう」というものであった。山村での約十カ月の生活は、いざ武装蜂起となった時に果たして「自分は逃げ出さずに済むか」という問題と向き合った生活でもあったが、結局、蜂起の時は来ることがなかった。

よく知られているように、一九五五年の第六回全国協議会（六全協）で、日本共産党は、分裂していた主流派（所感派）と国際派とを統一し、武装闘争路線からも転換した。『されどわれらが日々』は、日本共産党をめぐる政治史については史実にほぼ忠実に語られ

ているが、六全協についての佐野の反応は、山村工作隊として地下活動に従事した学生活動家たちの一般の反応と異なったものであった。一般には六全協の決定は、共産党に対して当時の学生活動家たちの多くが持っていた、党の無謬性神話の崩壊であったのであり、彼らの、革命党としての共産党への不信感の始まりであった。因みにこの六全協での路線転換が、後に反日共系左翼である共産主義者同盟の誕生に繋がっていくのであるが、佐野は党への不信感よりも蜂起の時を迎えることがなかったことに「安堵」を覚えたのであつた。つまり、二度目の「恥をさらすことなく済んだ」という気持であった。

その後、「革命をおそれる党员」である（と自分では思っている）佐野は、党を離れ、大会社に就職する。革命家としてはともかく、一般の会社人としては有能であった佐野は、「次第に仕事の魅力にとりつかれて」いき、会社でもその能力が認められ、副社長にも目をかけられて、副社長の姪と見合いするまでになる。しかしある時、吐き気をもよおした副社長に、その姪が胃癌ではないかと言ったことに対して、「ぞっとするように沈んだ表情」を顔に浮かべて姪の言葉を否定する副社長を見た佐野は、「副社長がその時垣間みてしまったのは、癌というような具体的な病気ではなく、彼の死そのものだったのではない」かと思う。そして、自らも自分の死というものを考え始め、人が自らの死を思った時に副社長のように「あ

れほど暗い表情をしなければならぬとしたら、人間の生きて持っている幸福とは、一体何だろうかという疑い」を持つ。

さらに佐野は、死に臨んで自分は何を考えるかと思つた時、「俺は裏切者だ！」と考えるだろうということに思い至つてからは、「何とも言いようのないかつたるさ」に見舞われ、やがて「全て面倒くさ」くなり、「生きてることへの面倒くささ」にも襲われて、遂に睡眠薬自殺を決意する。佐野は語っている、「結局死に臨んで思い起こすことが、過去の裏切りなのだとしたら、今の生活は一体何だろうかという思いですが、実の所、ほくの感じるようになったものは、そういう論理よりも、もつと理屈を抜きにした、生きることへの面倒くささでした」と。

以上が佐野の手紙の内容であるが、この手紙から私たちはある種の戦後青年にあつた典型的な思想を、あるいは思想とまでは言えないにしてもある種の心性を、読み取ることができるだろう。たしかに、佐野はリーダーであり激しくアジつてもいたわけだから、死者二名、負傷者二千名以上を出したメーデー事件の衝突の現場から逃亡したことに對して、自らを「裏切者」というふうに思い込んだのはわからなくはない。しかし、暴力に直面して恐怖を感じるのとは自然なことと言えよう。たとえば、砂川基地反対闘争や六〇年安保闘争を闘つた学生たちの手記を編集した『全学連学生の手記 装甲車と青春』（現代思潮社、一九六〇・九）にも、ある学生は、どうし

て自分たちは激しく警官隊とぶつかるのかと問い、「誰も喜んでぶつかりはしない。率直にいつて、私はこわい」と語っているし、また別の学生は、「信念とか理論武装というものが、決定的瞬間になつても、私に日常感覚を超越した行動を命じ、躊躇や恐怖や人間の自己保存的な本能をふりきつて行為に走らせうらるだろうか」と自らに問いかけ、「確信をもつて肯定の意を表わすことができない気がする」と語っている。

これらの手記を書いた学生たちは、筋金入りの学生活動家と言つていいだろうが、そういう彼らでさえ「こわい」と語り「恐怖」があると述べているのである。手記の学生活動家たちは正直であるとも言える。なるほど、有り得べき理想的な革命家ならば、恐怖を持たないかも知れないし、また持つたとしてもそれを表には出さないのである。しかしながら、佐野のように、そのような革命家でなければ革命運動に携わる者として失格であると思ふのは、少々異常である。おそらくこれは佐野一人の問題ではなく、デモの衝突の現場から一度逃げたくらいで自らをすぐ「裏切者」だと思ふ、佐野のような心理反応を生む土壌が、日本の革命運動あるいは反体制運動にあつたと考えられる。それは極めてリゴリスティックで且つ狭量な運動観、あるいは活動家像である。

たとえば、政治闘争における暴力を忌み嫌い、革命思想を堅持しつつも、徹底的な反暴力論者として自己を形成していくという方向

を模索することもあり得るはずだが、佐野はその可能性すら考えようとしない。佐野は、たとえ暴力を前にしても、言わば一から十まで非転向を貫かないならば革命家として失格だというふうに考えられていた、戦前型の革命家像から一歩も抜け出ていない。もちろん、この革命家理念は本人が革命家としての自己を律する、自分だけのためのモラルであったならば、佐野のような悲劇を生むとしても、単に窮屈な格率（カント）であるということでも済むが、もしもこれを仲間の活動家たちにも強要するようになるならば、肅清などの恐ろしい問題が出てくるであろう。実際にもこの後、日本の反体制運動の中でこの問題が起こっている。たとえば連合赤軍事件では、その強要は活動家たちが目指さなければならぬ（へ共産主義化）として現われることになり、その悲劇的な結末は多くのの人によく知られているところである。

このように見てくると、『されどわれらが日々』からは、いまだ共産党の前衛党神話が先進的な青年たちの間で健在だった時期の物語であったために、やむを得ぬというところもあつたにせよ、反体制運動に携わる者たちの心性が戦前のあり方からほとんど変わっていないことがわかってくる。反体制運動は、戦前昭和において、弾圧や転向さらにはリンチ事件などを経てきたわけだが、それら負の遺産はけっしてプラスの方へと転化されることはなく、戦後にそのまま持ち越されてきたわけである。その点において、『され

どわれらが日々』は戦前昭和の転向小説の「バリエーション」のようにさえ思われてくる。つまり、古い心性あるいは感性が戦後の先進的な青年たちを縛っていたということが、『されどわれらが日々』から見えてくるのである。しかし、『されどわれらが日々』にはそのことに止まらない問題も語られている。

二

佐野が至りついた最後の心境というのは、「面倒くささ」であったが、広い観点から言えば、それは生の無意味さの認識から来るニヒリズムであったと言えよう。佐野の場合には言わば生きること一般の無意味さというよりも、「裏切り」の過去を持つような自分の人生に何の意味があるのかというふうに、生の無意味さは「裏切り」の問題に収斂されているのであるが、しかし、「裏切り」はきっかけに過ぎず、「裏切り」の有無に関わず、佐野はその無意味さの認識に至りついたとも考えられる。それは、彼が副社長の癌の話題から死の問題を真正面に据えるようになったからこそ、生の無意味さに思い至り、その認識から来る倦怠の心理状態に捉われたと言えるからである。生きていくことは根本的に無意味である——『されどわれらが日々』の基底に流れているのは、このテーマである。そして、そのテーマを通奏低音のように奏でているのが、語り手の大橋文夫である。

小説の冒頭で文夫は自分が古本屋に立ち寄ることについて語っている。「それは無意味な時間潰しであった。しかし、わたしたちのすること、何か時間潰し以外のことがあるだろうか」とも。もつとも、文夫は高校時代に受験勉強に精を出したのであるが、しかしそれは、「目の前に目標があり、その要求にあわせて自分の頭脳を訓練すること」、「自分の若い頭脳が、機械のように正確に動作するそのことを楽しんだ」からである。そのことを文夫自身も「さぎに聞こえようか」と語っているように、たしかにこれは優等生特有の生意気で厭味な述懐とも言えなくはない。それはともかく、やはり注意されるのは、目的（合格）を果した途端、たしかに「月並みな喜び」もあつたのであるが、それとともに「あの確かな世界は終り、そこには不確かな、茫漠とした世界が広がっていた」と文夫が語っていることである。この実感に偽りは無いと言つていいだろう。

その後、文夫は何人かの女の子と恋愛の関係や、あるいは情事と呼ぶべき関係を持つ。そこには「激しい感情のやりとり」もあつたが、「しかし、その激しさは、空虚を支えはしなかった」と文夫は語る。やがて文夫は大学二年の時に優子という女性と、恋愛感情があつたとは言えないのに、関係を持つのである。そのため妊娠した優子は墮胎した後、自殺するが、優子からの速達の遺書を読んだ文夫は、意外にも「期待でふるえた」のである。普通なら「期待」云々はありえないことだが、ニヒリズムあるいはニルアドミラリの

状態に沈んでいた文夫にとつて、情事の相手の自殺はそれらを吹き飛ばすものとなるかも知れないと思われたわけである。文夫は語っている、「私は、私の心が激しい悔恨と自己嫌悪と罪の意識に充たされ、それとの闘いに私の全力が消耗しつくす輝かしい栄光の日々の復活を予感した」と。

しかしながら、「悔恨」も「自己嫌悪」も遂にやってくることはなく、「自分の空虚さは一時的、状況的なものではなく、自分と空虚は同義であることを知った」と文夫は思う。文夫の空虚は言わば板に付いたものだったというわけである。だから、佐野の自殺に触れて、「人間が生きてする仕事に意味がないと思うのは、おかしいわ」と語る婚約者の節子に対して、「それはあるかも知れない（略）。だが、ぼくにはないんだ」と語り、「何故」と問う節子に、「ぼくがそうだから」と答えるのである。

私たちは、このような文夫にカミュの『異邦人』の主人公ムルソールと同種の間人を見ることが出来るかも知れない。よく知られているように、ムルソールは母の死の翌日に女の子と海水浴をし、喜劇映画を見て笑いこぼるような青年であり、結局、海浜で友人とトラブルを起こしていたアラビヤ人を射殺するのだが、なぜ殺したかとか裁判官に問われて、「太陽のせい」だと答える。といつて、ムルソールは心が冷たいのではない。そうではなく、ムルソールは、通常の倫理や心理さらには価値感情から逸脱したところに立っているのであ

る。もつとも、ムルソーの場合はニルアドミラリとは異なっており、またムルソーは自分の精神、心理状態に自足してもいる。他方、文夫の場合は自分の「空虚さ」に必ずしも自足しているわけではなく、むしろそれを不快にさえ思っているもので、これらの点がムルソーと文夫との相違であるが、しかし、ともに生の無意味さ、あるいは生の不条理性の認識もしくは感覚が根底にあるところは共通している。別言すれば、文夫は犯罪を起こすには優等生過ぎるムルソーであると言えよう。さらに言うなら、生の無意味さの認識から「かったるさ」の心理に陥り、挙句の果てに自殺した佐野とも違っていて、文夫はその「かったるさ」を手なずけて飼い慣らしていたと言えようか。

この生の無意味さの感覚が小説の前面に出てきているところが、『されどわれらが日々』が戦後の時代性というものをよく表わしているところであろう。この小説は、革命運動の問題と生の無意味さの問題とを、それぞれの青春群像にうまく点綴して、静かで沈んだ語り口で物語られた小説であった。中村光夫が芥川賞の選評で述べているように、挿入された手紙の文体がどれも同じ文体だったりする問題もあるが、小説のほぼ全体が生が無意味さから来る「かったるさ」の色調で蔽われていることを考えれば、文体の問題は大目に見ることもできよう。冒頭でも触れたが、秋山駿の言うように、たしかに『されどわれらが日々』は「一六〇年安保闘争の敗北後の

青年達の心情に合致していた」と考えられる。しかし、それだけではない。『されどわれらが日々』には肯定的で前向きなメッセージも語られているのである。むしろ、そのメッセージの方に作者は力点を置こうとしていたとも考えられる。それは節子の生き方から見られるメッセージである。

節子も学生時代に革命運動と関わりを持ち、また六全協に対しては党の無謬性が崩れて行った時、同時に「理性をあえて抑えても党の無謬性を信じようとした私たちの自我」も崩れて行く体験をした。節子は、当時の多くの学生生活家たちとほぼ同質の体験をしたわけである。大学卒業後の節子は、商事会社に勤める生活をしてきたが、文夫と婚約する。それは節子自身も望んだ婚約であった。しかし節子は、小説の終わりに至って、生の無意味さの感覚から抜け出さない文夫との婚約を解消して、東北の小さな町のミッシヨンスクールで英語教師になろうと一人旅立つのである。旅立つ前に、節子は自分が文夫から離れていくのは、「ただあなたに会うためなのです」という言葉のある手紙を文夫に送る。その手紙で節子は、これからの生き方を「過去の規制によってではなく、過去の否定の上につくり変えようと試みて、何故いけないのでしょうか」、「私たちにあって何より大切だったのは、私たちの生活であり、その中に何らかの意味を見出す、見出せなければ、それをつくり出す努力だったのではないのでしょうか」と語っている。

節子のこの生き方は、サルトル的な実存主義で言えば、一種の「投企」と言えよう。神無き実存主義においては、本来的に、あるいは先験的に言つて、生に意味が無いことは、自明の事柄である。しかし、その無意味さに蹲ったり、ベシミスティックな心情の中に閉じこめるのではなく、生が無意味ならば自らの生き方によって意味を作り出していこうとするのが、神無き実存主義の思想である。人生に向かつて自らを投げ企てようとするのである。サルトルは『実存主義とは何か』（伊吹武彦訳、人文書院、一九五五・七）で端的にこう語っている。すなわち、「人生は先験的に意味をもたない」にせよ、また「諸君が生きる以前において人生は無である」が、「しかし人生に意味を与えるのは諸君の仕事であり、価値とは諸君の選ぶこの意味以外のものではない」と。節子は言わば向日性的で且つ積極的な姿勢で、実存的な生の選択をしたのである。

このように見てくると、マルクス主義の革命思想と革命運動に捉われた青春の問題や、しかしながら革命党の無謬性の神話をもはや信じてことができなくなった時代の問題、さらに生の無意味さの感覚を否定できない問題など、つまり戦後の日本社会に浮上してきたこれらの問題を、『されどわれらが日々』は、それほど長くない物語の中にうまくコンパクトに纏め上げた小説であったと言えよう。だから、人々の、とくに若い世代の内奥の琴線に触れて、その後も長く読み継がれる、青春の名作小説となったわけである。

もちろん、幾つか首を傾げざるを得ないところも、この小説にはある。たとえば、文夫は大学に合格してから、あるいは合格と同時に、生の無意味さに直面したのであるが、受験勉強をした高校時代にそれに直面してもよかつたと思われる。さきに引用したように、文夫は受験勉強について、「目の前に目標があり、その要求にあわせて自分の頭脳を訓練すること」を楽しんだと語っているが、前提となつている「目標」そのものに果たして本質的な意味や価値があるのかと、受験生の時に何故問わなかつたのだろうか。優等生であることから得られる、受験戦争の戦利品（合格）だけはしっかりと獲得しておこうと思つたのだろうか。生の無意味さは受験生であろうと大学生であろうと、変わりはないはずである。むしろ受験生の時の方がその問題を突きつけられると思われるが、どうであろうか。

そのことも関連するが、もう一つ首を傾げるところは、節子の「投企」についての文夫の反応である。文夫は、「私たちはおそらく老いやすい世代なのだ」と語りながらも、しかしながら、「節子はまだ老いることを拒否している。ことによつたら、節子は私たちの世代を抜け出るのかも知れない」として、自分たちの世代が節子を持つたことを「誇り」とすること、そして自分たちが本当に老いた時に後の若い世代に、「私たちの中にも、時代の困難から抜け出し、新しい生活へ勇敢に進み出そうとした人がいた」と語ろう、と思う。そのことで若い世代を勇気付けられるなら、「私たちの生にも、

それなりの意味があった言えるかも知れない」とも文夫は語るのである。

おそらく、小説のこの終章部分が感動的などころでもあるが、節子を「誇り」と考えるのはいいとしても、節子に「投企」する生き方を突きつけられたと言える文夫自身の生き方には何の変更もないのかという疑問が出てくるだろう。しかし、どうも文夫自身は変更するつもりはないようなのである。自らの生に意味を与えようとすると「投企」は、もっぱら節子に任せておいて、文夫は相変わらず「自分と空虚は同義である」というような生を続けることになりそうなのである。それは、文夫が「老いやすい世代」の一人で、これまでの生き方を変更するにはすでに老いているからだというわけであろうが、しかし、それは言い逃れであろう。「老いやすい世代」という言葉は、『されどわれらが日々』で少し有名になったようだが、この言葉は「投企」しないことの言い訳ではないか。文夫はそれまでの自分の生あるいは生活の枠組から外へ出ようとしないのである。何故なのか。

三

宮内豊は『筑摩現代文学大系89 小田実・柴田翔集』（筑摩書房、一九七九・四）の解説「人と文学」の中で、柴田翔の主人公たちは多くの場合、「踏み外さないひと」であると述べている。何から「踏

み外さない」のかということについては、宮内豊は必ずしも明示的に述べていないが、「流連荒亡に縁のないひとたちである」とも述べていることから、凡その見当をつけることができるだろう。同解説で宮内豊が柴田翔の主人公たちのことを「エリート」「知識人」「秀才」などと述べていることから推察できるように、比較的上層の選ばれた階層の人生からは「踏み外さない」ということである。たしかにそうであって、生の無意味性の認識が身に沁みているはずの文夫は、すでに引用したように、「自分の空虚さは一時的、状況的なものではない」と思っているのだが、しかし『異邦人』のムルソーのような犯罪は決して起こさないのである。文夫は赴任予定の大学の語学教師として安定した生活を送り続けることだろう、「自分と空虚は同義である」と眩きながらも。

おそらく柴田翔の小説を愛読する読者の中にも、主人公たちの「踏み外さない」ことに対して飽き足らない思いを持っている人もいると考えられ、もし限界ということを言うならば、そこに柴田文学の限界があると言えることができるかも知れないし、またやはり宮内豊が同解説で述べているように、そのことは「日本の市民社会の一応の成熟」とも関連があるだろう。つまり、柴田翔の小説は、市民というよりも小市民の生活に馴染んだ、戦後日本の多くの人々の生活感覚に適合するものであったわけである。しかしながら、そうではあったにしても、自分の生に意味を付与しようと「投企」する

人生の選択をした節子のような人物を造形したということは、評価していいのではないかと考えられる。そこには希望があり、読者への勇気付けがあったのである。以後の柴田翔の小説も、大きく見れば、基本的に「踏み外さない」人たちと、敢えて踏み出て生きていくこうとする人たちとの物語であると言える。次に幾つかの小説について見ていこう。

『されどわれらが日々―』を書き終えた直後に構想された小説であったと、その「あとがき」で柴田翔が述べている『われら戦友たち』（文藝春秋、一九七三・一一）は、単行本として刊行されたのはそのずっと後になったが、作者自身が「あとがき」で解説しているように、この小説は「多様な登場人物が現われ、彼らの様々な視点から世界が見られ」た小説であり、いささかポリフォニックでさえあると言える。保守派でシニカルな大学教師、一步間違えば『カ라마ゾフの兄弟』でイヴァンが語る物語に出てくる大審問官のような人物にさえなりかねない学生運動の活動家、あるいは、学生運動に新聞の資金を提供する代りにその紙面にラブホテルの広告を掲載してくれと言う怪しげな実業家、また日本に滞在中のアメリカ人女性、さらにはシニカルではないものの、『されどわれらが日々―』の大橋文夫のように空虚感とともに生きている大学助手など、この小説には多くの人物が登場するが、それらの中で異質なのが三木公子という女子学生である。彼女も学生運動に関わっているが、彼女

の理想主義はひた向きで且つ健全、素直なのである。

三木公子はたとえば、「自分の不幸によってどんなに心をむしばまれているにせよ、人には絶望する権利はないのです。自分の個人的不幸によって世界全体を絶望の暗色で塗りつぶしてはならないのです」、と何の銜い気もなく語る。そう語る公子とは対極的に、「俺のこの一週間、一ヶ月、一年間、十年間。その無意味さ。不確かさ」を思い、また「自分がこの年月、何をなし、何を生きてきたかをふり返ってみれば、そうした自己制御が彼にもたらしにくれたものは、無に過ぎなかったのではないか」、と思わざるを得ない大学の助手の鶴木康吉は、三木公子を見て、「公子の生活もまた同じ生の無意味さにさらされながら、その無意味さの中から、あんなにも確かな生をつくり出した」、と思うのである。

鶴木康吉の言う「自己制御」が、あの「踏み外さない」あり方のことだと見えるが、鶴木康吉が『されどわれらが日々―』の大橋文夫に相当する人物ならば、〈投企〉をした節子に近い人物が三木公子であるとさえよう。彼女は「無意味さの中から」生の確かな意味をつくり出そうとしている人物なのである。この三木公子の生き方、あるいは生きる姿勢は、アメリカ人女性ジェーンにとっても生きていく指針となるものであろう。ジェーンの思いについて語り手はこう語っている。「ジェーンが欲したのは、(略) 自分がこの社会から滑り落ちるかという不安に縮こまりながら、なげなしの毎日を

なく、一度でいいから、生きるということの核心にぶつかることであつた」と。

『われら戦友たち』には、柴田翔の「あとがき」によれば、もととはこの題名の予定であつたものが雑誌「文學界」に連載する直前になって、「不意の弱氣」のせいで「そしていつの日か……」という題名に変更され、単行本にされる時に当初考えられていた題名である「われら戦友たち」に戻したという経緯があつたようである。柴田翔自身は、当初案を変更した理由を、「一点に凝縮する主人公を持たずに」一年以上の雑誌連載を持たせることができるかどうか、「自信が無くなつた」ためであると語っている。しかし、そういふ技術的問題とともに、この題名変更の経緯からは、「われら」は不確かで無意味さの中で自分たちは生きていかざるを得ない「戦友たち」であるが、だが「いつの日か」、生の意味を自ら作り出し、そして人生を生きていく「戦友」として手を取り合えるかも知れない、というような作者の思いが見えてくる気もしてくる。

『われら戦友たち』で肯定的に扱われているのは、向日性的で健康な精神を持っている女性の三木公子であるが、「生きるということの核心にぶつかること」を真摯に願っているジェーンも、やがては自由なへ投企を試みて生きていくかも知れない人物である。柴田翔は、『されどわれが日々』の節子にせよ、『われら戦友たち』の公子やジェーンにせよ、男性よりも女性に期待をかけるところが

あつたのではないかと思われる。そのことは、たとえば『立ち盡す明日』（新潮社、一九七二・四）においてもそうである。

『立ち盡す明日』の主人公は信託銀行に勤める佐室孝策である。彼は海外調査室での地味な仕事にも「ひそかな誇り」を持ち、家庭においても妻と一人子と安定した穏やかな生活を営んでいたが、そこに妻の従妹の由紀子がある事情から同居するようになる。この同居は、年下の若い由紀子と仲の良かった妻の方が積極的であり、孝策はしぶしぶ同意したというものであつたが、ある出来事をきっかけに由紀子と孝策との間に恋愛感情が芽生える。そのことを察知した妻も、かつて一度だけ接吻したことのある男性に会いに行く。しかし、結局、由紀子は孝策の家を出て行き、孝策と妻との生活は元通りの安定した状態に戻っていきさうである。

この小説においても注目されるのは、女性の由紀子であり、由紀子の選択した生き方である。彼女は手紙を残して孝策の家を出て行くのだが、その手紙には、自分が「父の庇護の下に育つて」きたこと、噂のあつた高校の恩師との関係も、「父の代理」となる人への接近であつたこと、また孝策への思いもそれであつて、自分は「自由になりたかつた」が、「自由になるのは、同時にまた、怖いことでも」あつたことが語られていた。そして由紀子は、これからは「自活して行きたい」と語り、こう述べている。「お前などに出来るものかと言われることは知っておりますが、その出来ないと判つている

ことを自分に課することも、自分の自由に達する道でしよう」と。

それでは孝作はどうであろうかと言えば、小説の最初の方で、「彼は普通に就職し、それによって自分に外側からの桎と与えることをのぞんだ。そうした桎なしに生きて行くだけの自信が、彼にはなかった」と述べられている、その「桎」から、小説の終わりに至っても遂に出ることはないのである。まさに孝策は、宮内豊が指摘している「踏み外さないひと」である。この孝策のあり方に歯痒さを感じざるを得ないものの、「自分の自由に達する道」を歩いて行こうとする由紀子には、実存的な「投企」を試みようとする姿勢が見られ、この小説における救いとなっている。

このように、柴田翔の小説に登場する人物の中では、自分たちを縛っている「桎」から積極的に出て行こうとするのは女性たちであるが、それに対して男性たちは「桎」の中での生活に閉じこもりうとする。節子と文夫に見られる対比の構図が繰り返されるのである。もっとも、出て行こうとする、というよりも「踏み外」した男性もいなくはない。たとえば、『鳥の影』（筑摩書房、一九七二・一）に収められた「鳥の影」などの短編小説の男性たちである。「鳥の影」の主人公の男性は大企業のエリートサラリーマンだが、高校時代の旧師の葬儀に参列し、昔の同級生と再会したことがきっかけとなつて、遂に少女連れ込み事件の現行犯として逮捕され、拘留所の三階の窓から飛び降りて、不運にも走ってきた車に轢き殺され

る。主人公は「投企」したというよりも、それまでの生活のレールから単に脱線したと言うべきであり、その結果、悲劇的な結末を迎えたに過ぎないと言える。また、同書所収の「彼方の声」の主人公の男性にとつて、「踏み外」すことは「彼方」の世界に足を踏み入れることであり、「彼方」とは、この世ならぬ世界や狂気の世界のように見える。結局、彼は「今の仕事を続けよう。そして今の生活を守ろう」と思う。といって、では今の生活に不安や言わば疎外感が無いのかと言えば、それはやはりあるのだが、しかし、彼は「彼方の声」に誘われて「踏み外」しては危険だと思ふのである。

こうして見てみると、自由に向かつての主体的な「投企」を果敢に試みる女性たちに対して、男性たちの「踏み外」しは、単に人生の転落を意味していることに終わるのが、柴田翔の小説世界であると言える。もちろん、述べてきたように、多くの男性は決して「踏み外さない」のである。だから、柴田翔が「投企」する女性に期待していたことは確かである。ただ、「投企」の決意は抽象的に語られてはいるのだが、それが具体的にどういう人生として展開していくのかという問題については、初期の柴田翔は語らなかつた。ニヒルな倦怠の中での生と、それから出て行こうとして「投企」する人生を生きようとするものの、それは抽象的な決意表明で終わるしかなかった小説世界であつた。しかし、中年期に入った柴田翔は、そのような小説世界から抜け出そうとしたのではないだろうか。

四

『ノンちゃんの冒険』（筑摩書房、一九七五・五）は、ノンちゃんという二十歳過ぎの女の子を主人公にして彼女をめぐる人々の話である。この小説には、たとえニヒリズムを掻い潜らざるを得ないにしても、人は人生に対して肯定的で積極的な姿勢で生きて行くべきであるという、期待と希望のメッセージが込められている。

たとえば、年金さんと呼ばれる四十近い人物によるメッセージである。彼は、大企業のエリートサラリーマンだったが、比較的若い時に会社を辞めて、親の遺産でマンシヨンの中の二軒を買い、それを人に貸してその家賃によって裕福ではないものの、そこそこ困らない生活をしている人物である。年金さんは思う、「人類の全歴史はすべて、生の空虚さにもかかわらず健気に生きてきた人間たちの個人史の集積なのだ」、「生きよ。あらゆる悪、あらゆる疑惑、あらゆる絶望にもかかわらず、生命は未来に向って生きよ。それ以外、生きている人間に何が言いうるのか」と。年金さんは、未婚のまま妊娠したノンちゃんが墮胎を止まったことを知った時も、悪い環境の中でも芽生えた生命が生き続けていくことを阻む権利は誰にも無いとして、生きていくことは「空しいことではない。それは私たちが現在に生きているものが持ちうる唯ひとつの正当な希望なのだ」と思うのである。

また、大学教員を辞めた、仙人さんと呼ばれる人物は、アジア大陸のある国へ行脚の旅に出るのだが、年金さんへの手紙の中で「絶望はいい。だが、ニヒリズムは悪徳だ」と述べ、最後に年金さんに会った時には、「生きて行くことは恐ろしい。だが、それにもかかわらず、生きて行くことは尊い。みんな生き続けてくれ。それがぼくの心からの願いだ」と語ったのである。仙人さんのこれらの言葉、とくに「ニヒリズムは悪徳だ」という言葉は、『ざれどわれらが日々』の文夫に聞かせてやりたい言葉であるが、仙人さんや年金さんたちが語る人生観、あるいは、こうあって欲しいという生きる姿勢を、言わば即的に体現しているのがノンちゃんである。

ノンちゃんは、「人生は今すぐ全部という訳には行かないものだ」というふうに思っているのだが、考えてみれば、この「今すぐ全部」という性急な指向が、反転してニヒリズムを生むことになるのではないだろうか。希望が「今すぐ全部」実現することなどありえないが、往々にして人は「今すぐ全部」を性急に求め、それが叶えられないことからニヒリズムに陥り、人生は空しいと呟く。柴田翔は、『ゲーテ「ファウスト」を読む』（岩波書店、一九八五・四）の中で、やはりかつては「今すぐ全部」を求めたファウストを例に挙げながら、人々もたとえば革命予兆期などには悪い旧秩序さえ倒れば「今すぐ全部」を満足させる新秩序が来るように思いがちであるが、しかし、それは夢想であったことをやがて気づくようになる

と述べ、「それを自覚した時、時代は壮年期に入ったと言つてよい」と語っている。このことは柴田翔自身にも言えることではないかと思われる。

つまり、柴田翔も壮年期に入つて、かつては「今すぐ全部」の反転としてのニヒリズムに陥っていた状態——『されどわれらが日々——』の文夫は、そこから造形された人物と言える——から抜け出し始めた、少なくとも抜け出そうとしたのではないかと考えられる。これは、やはり成熟と呼ぶことができるだろう。もちろん、前述したように、『されどわれらが日々——』の節子に典型的に見られるように、ニヒリズムから超え出ていこうとする人物がいた。だが、それはへ超え出るのだ」という、抽象的な決意表明だけに終わっていた。生きていくことの具体的で様々なあり方を、そのまま肯定しようとするものではなかった。しかし『ノンちゃんの冒険』では、そのことがはつきりと語られるようになったのである。不完全な生であらうと、それを肯定することから始めなければならない、たとえ不完全なままであつても、決して否定してはならない、というわけである。

また、『ゲート「ファウスト」を読む』には、遂にファウストが「いさおしなしに救済」（傍点・引用者）されたことも述べられ、「ファウストの救済は、人間の尺度を越えたところでの、宇宙の生命の絶対的肯定なのです」と語られているが、この「宇宙の生命の絶対

的肯定」は「生きて行くことは尊い」と語る仙人さんの言葉に通じていよう。さらには、仙人さんも「いさおし」（同）については、「何の勲いさおしもなく受ける報酬」というふうに語っているのである。

柴田翔が五七歳の時に刊行された『突然にシリアス』（筑摩書房、一九九二・二）のムムはノンちゃん系譜の人物であるが、やはり注意されるのは、すでに初老の域に入っていると思われる、元映画女優のミミが、かつての先輩男優の堅介老人にこう端的に語っていることである。すなわち、「人生を後悔するのはやめましょう。（略）私たちの人生は、各々そのまま、充分いい人生だったじゃないませんか」と。

もちろん、不完全な人生を、その生きていること自体を肯定しようとすることは、社会の問題をもあるがままに容認しようとすることではない。堅介老人が毎朝、日本国憲法の前文を大きな声で朗唱していること、また単行本の帯に、「突然ですが、平和憲法を守りましょう」という、読者への著者のメッセージが書かれているところに、現在の日本社会に対する柴田翔の姿勢を見ることができるとともに、社会の問題に対しては譲ることなくプロテストしていくべきであるとする、柴田翔の強い思いを読み取ることができらるだろう。そのことは決して見逃してはならない。

こうして見てくると、「今すぐ全部」という性急な指向と、その反転としてのニヒリズムとから脱却して、不完全な人生を肯定しつ

つ、生きて行くこと自体の尊さを噛み締めながら生きて行くこととするところに至った柴田翔の小説世界の歩みを見ると、戦後青春の成熟の跡を確認することができるだろう。

—あやめ・ひろはる、ノートルダム清心女子大学教授—